カナダ特派員日記⑥

カナダの子供歳時記

橋田忠明

デパートの「カム・バック・ツー・スクール」の大セールが終ったのもつかの間、十月はカナダの子供たちにとって〝待ちに待ったシーズン〟である。

十二日は感謝祭の休み。感謝祭の前後になると、子供たちは友だちのかばんに手紙やチョコレートを入れあう。家に帰った子供たちがそれを見つけて、家中がにぎやかになる。そして、第四週はハローウィン——。例のカボチャの〝お化け〟で日本でも有名だが、たとえばトロントでは、その夜は子供たちがインディアンや幽霊などの扮装をして、近所の家庭を巡回する。各家庭ではキャンデーを沢山用意して、子供たちが持っているビニール袋に入れてあげる。日本から初めてカナダにやってきた子供たちも、このハローウィンの習慣に、すっかりカナダが好きになるという。

子供の目からカナダの一年を見ると、それは心楽しい催しで満ちている。カナダでは九月から新学期が始まり、六月で終る。七、八月は夏休み。小中学校では始業の日に、学校から一年間のスケジュール表を持ち帰る。勉強道具は教室においたまま。宿題もあまりない。授業は先生がいかに子供全員を楽しく勉強させるかに知恵を絞る。昼食時は子供たちを家庭に帰す学校が多い（最近は冬期に給食制度がふえつつあるが）。才能に応じた教育が中心。幼年時代は情操教育や社会的なしつけが重視される。

カナダの親はいい意味の〝親バカ〟である。学校での授業参観、はたまたコミュニティでの水泳、芸術クラブなどで見る親は、自分の子供に最大限の賞め言葉を与え、抱えるようにして一緒に帰る。社会的なしつけには厳しいが、後は〝過保護〟とも言える。しかも、教育熱心。小学生以上になると、語学、ピアノ、バイオリン、水泳、テニスなど学校以外の〝お稽古ごと〟をさせている。上級を目ざして私立学校に行かせる親も多い。日本ほど苛酷ではないが、受験競争は高校に十セントで楽しませている。輪投げの景品は不要になったおもちゃや手作りの工作品だったりする。親も子供と一緒に輪投げに興じて、〝大枚〟一ドルを進呈したりしている。集まったお金は子供たちがベトナムに送った。

子供たちのアイドルがテレビ漫画の主人公だったり、アイスホッケーのスター選手だったりする点は、日本と変わらない。ことしの夏、Tシャツの胸に「アルプスの少女ハイジ」を描いたカナダの少女たちをよく見かけた。「ハイジ」は日本で制作されたTV漫画だが、彼女らはそれを知らない。「赤毛のアン」が放映されたら、ヒット間違いなしだろう。

カナダで生活していて、こうした伸び伸びした子供時代の性格をそのまま残している政治家、企業のトップ、あるいは秘書嬢などによく出くわす。こだわりのない、純粋な部分を持ち続け、時には善良な〝童心〟に帰る。米国や日本ほどの厳しい「競争社会」ではない、と言ってしまえばそれまでかも知れないが、一面、うらやましい気がする。

カナダの児童図書館に日本に関する本が少ないのもこの際あげておこう。私の親しい、ある教育担当のお役人のアドバイス。「多額の金を投じて日本的な催しを開くより、カナダの全小学校に最新の日本紹介のやさしい写真つきの本を寄贈するなど、小中学生層をねらってごらんなさい」と。子供の頃に「日本」を習わなかったカナダのリーダー層は多い、という。

（日本経済新聞 トロント支局）

て育てている人が多い。カナダはもともと「移民の国」であるが、この辺りの考え方は開放的だし、色んなカナダの家族と接すると心が温まる。

最近の子供たちの流行は、語学の勉強である。英語圏ではフランス語、仏語圏では英語を、小学校から習わせる。これも英仏両用語の社会で、子供たちが将来言葉の上で損をしないように、との親の配慮からだ。第二は子供たち同士のパーティ。誕生祝いには親しい子供たちがささやかな手作りのプレゼントを持ち寄る。主人公の子供がホスト役を立派に勤め、親は側面援助をするだけだ。休みの日の〝泊りあい〟も流行らしい。

もうひとつ、カナダの子供たちは自分の希望は自分で稼ぎ出して達成しようとする。携帯ラジオなど欲しいものを買いたい時に、子供たちは親から半分もらい、残り半分はアルバイトで稼ぐ。夏休みの芝刈り、新聞配達、冬の雪かき……。夏休み旅行でマリタイムス（東部沿岸地域）にドライブした折り、数人の子供が貝殻細工を並べて売っているのを見た。聞くと、「買いたいものがあるので、自分が工作して売っている」という。それは幼稚でいかにも素人くさい貝殻細工だったが、私たちのほかにもカナダ人の旅行者が車を止めて買っていた。

ボランティア活動も見られる。新聞でベトナム難民の子供たちの話を読んだ子供たちが、日曜日に一軒の庭で〝子供フェア〟を開いていた。のぞくと、めいめいが趣向をこらしたゲームを作り、〝お客〟から。言わば、〝楽しく遊んできた〟子供たちが世界の一流レベルに並ぶのは、大学での教育にある。

紙数も少ないので、普段の生活から興味深い点を挙げてみる。ひとつは「もらい子」の習慣。カナダ人の親友Bさん、アフリカ駐在の折りに身寄りのない黒人の子供を引き取り、自分の子供たちとわけへだてなく育てている。収入が許せば、こうした恵まれない子供たちを引き取っ